

# 手術待機中の家族に対する援助についての検討

—患者の家族10名に対し、待機中の思いと過ごし方についての面接調査を行って—

## A棟6階北病棟

○堀内 美和 中嶋 美智子  
杉田 尚子 関山 真澄  
錦 三恵子 石川 瑞代

### 1. はじめに

現在、6階北病棟（以下当病棟とする）では、心臓・血管・呼吸器・口腔疾患の患者に対し手術が行われている。当病棟では、家族には手術が終了するまで面会室で待機してもらっている。家族から、「手術の予定時間が過ぎたのですが、まだ連絡はありませんか」と質問されることがある。しかし、手術の進行状況は病棟に連絡がないため分からず、「何かあれば連絡があります」という事しか伝えられていない。看護婦は、手術室へ患者を送った後、「面会室でお待ちください」と伝え、待機している家族に対しては意識が薄い現状である。

そのような現状から、私達は家族に対し何か援助ができないかと考えた。そこで今回、手術終了を待つ家族の思いや過ごし方を知り、家族への援助方法について検討したので報告する。

### 2. 研究方法

調査期間：平成12年9月1日～9月15日

対象：全身麻酔下で手術を受けた心臓・血管・呼吸器外科の患者の家族8名と、口腔外科の患者の家族2名。

方法：研究メンバーが、質問用紙を用いての面接調査（表1参照）を行う。患者の状態が安定する、術後7～10日目の時期とする。

場所：ガンファレンス室

面接所要時間：平均22分

### 3. 結果

対象者は、年齢40代～80代の男性3名、女性7名で、患者との続柄は配偶者9名、子ども1名だった。手術待機場所は、面会室5名、病室3名、面会室と病室の両方が2名だった。手術待機時間は、4～5時間が1名、5～6時間が2名、10～12時間が7名だった。そのうち、手術終了予定時間を延長したのは3名で、延長時間はそれぞれ30分、2時間、3時間であった。手術予定時間を過ぎた時に1名、1時間延長時に2名が、詰所に手術室より連絡が入っていないかたずねていた。待機人数は2～6名で、患者の家族、兄弟が大半を占めていた。手術待機中の過ごし方については、会話が半数を占め、他にテレビ、読書などであった。「手術の事が

気になり、何もする気になれない」「本を読んでも全く頭に入っていない」という声が聞かれた。

待機場所の雰囲気は、面会室の場合、「何も気にならなかった」が4名、「テレビの音や面会者の話し声が気になった」が3名だった。手術待機中、待機場所を離れたいと思ったのは3名で、「同じ場所に座っているとしんどい」「精神的に長時間待っているのが苦痛」という声が聞かれた。離れたいと思わなかったのは7名で、「手術が気になって離れられない」「他に行く場所もなく、待つように言われていたから」などだった。手術待機中に抱いていた思いは、「心配、不安だった」が4名で、「医師を信頼しており、安心していた」が2名だった。「信頼しているが不安もある」が4名で、「時間の経過と共に不安と心配は強くなった」「手術室へ何度か様子を見に行った」などの声もあった。手術待機中に看護婦より声かけがあったかについては、9名が「なかった」と答えていた。手術待機中、看護婦に希望することはないかについては、「特に何も無い」が4名、「希望する」が6名で、内容は、「もう少しで終わります」「順調にいます」など、何らかの声かけをしてほしいと全員が望んでいた。

#### 4. 考 察

手術待機中に抱いていた思いとして、8割の家族から不安、心配という声が聞かれた。手術の経過が気になり、テレビを見ていても、本を読んでも頭に入っていないというような、家族の緊迫した心理状態が感じられる。このような心理状態で手術を待機している家族に対し、現在ほとんどの看護婦が声かけを行っていない状況である。その理由として、入院してから手術までの期間が短く、十分家族と関わっていないことや、患者を手術室へ送った後、残って待機している家族に目を向けていない事があげられる。家族と一緒に手術前のオリエンテーションを行うなど、患者と共に、家族に対しても援助していく必要がある。守山らは、「看護者は、精神的、身体的に疲労している家族の感情を配慮し、積極的に接していく必要がある」と述べている。日々、患者の手術終了予定時間を把握し、待機中の家族の元へ足を運び、声かけを行うことで、家族は精神的に落ち着くのではないかとと思われる。

家族から看護婦に対して、手術の経過を教えて欲しいという希望があった。そこで、手術中の経過報告について医師と検討したが、当科の手術はいつ急変するか分からないという特色上、難しい現状にある。そのため、看護婦から家族に、「まだ連絡は無いのですが、大丈夫ですか」など声をかけていく必要がある。また、患者を手術室へ送った後、その日の担当看護婦の名前を伝え、何かあれば呼んでもらうように声をかけると、家族は安心するのではないかと考える。

手術終了予定時間を過ぎると、家族は経過と共に不安は強くなり、自ら詰め所に手術の状況を聞きに來たり、手術室まで見に行くなどしている。児玉らは、「家族の不安を最小限にするには、手術が延長して30分以内に援助する必要がある」と述べている。このことから、手術終了予定時間を過ぎ、30分以内には援助が必要といえる。しかし、予定時間内に手術が終了していても、待機中の家族は不安を抱いており、手術時間に関係なく声かけを行っていく必要があ

る。

## 5. おわりに

今回の調査より、手術待機中の家族の思いを知ることができ、患者同様、家族への援助の必要性について再認識することができた。手術は、看護婦にとってありふれた日常的な出来事であっても、患者や家族によっては、人生最大の危機を体験しているかもしれない。今後は、術前からの家族との関わりを行っていき、家族ら身も看護の対象として援助していく必要があるといえる。

今回の調査を行うに当たって、患者家族の方々に多くの理解と御協力を頂いたことに深く感謝いたします。

## 引用文献

- 1) 守山聡美：待合室で手術終了を待つ患者家族のニーズに関する調査，成人看護，27巻，52～55，1996
- 2) 児玉寿子：手術が延長された家族に対する看護介入の時期の検討，第5回成人看護I，1994

## 参考文献

- 1) 内村洋子：手術を待つ家族の思いと術中の過ごし方，日本手術医学会誌，19巻3号，333～335，1998
- 2) 荒内正弘：手術患者を待つ家族の不安，全国自治体病院協議会雑誌，372巻，66～70，1999
- 3) 石塚ちひろ：病棟にて手術中の患者を待つ家族の思いと私たちの関わりについて，聖隷浜松病院看護研究集録，1997巻，236～238，1998
- 4) 荒川靖子：家族のニーズ充足のための看護援助，臨床看護，19巻6号，801～803，1993

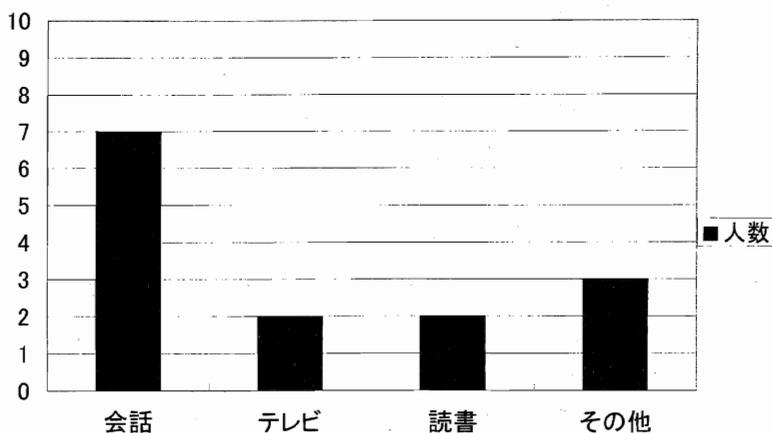


図3. 手術待機中の過ごし方(複数回答) n=14

表1 手術終了を待つ家族の思いと待機中の過ごし方についての調査

1. 性別 (男 女)
2. 年齢 ( ) 歳
3. 患者様との続柄 ( )
4. どこで待っておられましたか
5. 手術待機時間 ( ) 時間
6. 何人で待っておられましたか ( ) 人
7. 手術終了を待っておられる間、何をされておりましたか
8. 待機場所の雰囲気はどうでしたか
9. 手術を待っておられる間、待機場所と離れたと思ったことはありましたか
10. それはどのような理由でですか
11. 手術中、どのような思いで待っておられましたか
12. 手術待機中、看護婦より何らかの声かけはありましたか
13. 手術を待っておられる間、看護婦に何か希望される事はありましたか

表2 質問調査の対象者区分

対象者	患者の病名	続柄	年齢	待機場所	手術時間	待機人数
A	冠状動脈疾患	妻	50歳	面会室	11h	3人
B	舌癌	妻	60歳	病室(6人部屋)	10h	4人
C	肺癌	妻	64歳	面会室	6h	5人
D	閉塞性動脈硬化症	妻	68歳	面会室	5~6h	3人
E	肺癌	妻	61歳	病室(2人部屋)と面会室	4h	3人
F	冠状動脈疾患	妻	62歳	病室(6人部屋)	12h	5人
G	下顎歯肉癌	長女	47歳	病室(6人部屋)	10h	2人
H	胸部大動脈瘤	夫	80歳	病室(個室)	11h	5~6人
I	僧房弁閉鎖不全症	夫	61歳	病室(4人部屋)と面会室	11h	3人
J	冠状動脈疾患	夫	74歳	面会室	10h30m	5人

表4 家族の思い

心配・不安

- ・何時に終わるのか。無事を祈るのみ。
- ・手術がうまくいくのか。大丈夫か。手術の経過は良いか。

信頼していた

- ・安心。おまかせしていました。医師を信頼していました。
- ・2回目の手術だったので不安はなかった。生命の危険は考えなかった。

不安と信頼が混じっている

- ・医師を信頼していた。しかし何の連絡もなかったため、時間の経過と共に「無事にいっているのだろうか」という不安と心配が強くなった。
- ・前もって医師より手術の説明を聞いていたので、それほど心配ではなかったが、予定時間を過ぎた頃から心配だった。
- ・医師を信頼していたのであまり心配はなかったが、手術がどうなっているのか不安もあった。
- ・手術は成功すると思っていたが心配で、3回ぐらい手術室まで様子を見に行った。